

思い出の写真シリーズ 第16回

第33回国民体育大会“やまびこ国体”

長野市陸上競技協会 副会長 寺島大士

昭和53年10月15～20日、松本広域公園陸上競技場で開催された時の最終日に写した写真です。

私は中距離の強化コーチとして参加しました。この写真は中長距離、競歩の選手、コーチのメンバーです。

長野1H対51年、対53年長野国体に向けた強化に取り組む為に、昭和48年に本格的に強化部が発足したことを思い出します。その中で、故高山重之先生が部長で大変ご苦労されたことを今でも思い出します。最初に目標は天皇杯、皇后杯の獲得に焦点を合わせて

行くとの事、これは大変なことだと思い、また開催県がこれまで毎回のごとく獲得してきているとの事、何が何でも目標に向かって進めていくことになりました。

前年度は青森国体で結果を見て本番にそなえることで、昭和51年から本格的な強化合宿が、長野、松本、富士見等で数多く開催されました。

53年本番では、競歩の飯塚君が1万Mで2位に入賞されました。また、中長距離でも入賞こそ逃しましたが、決勝で成年男子1万Mで倉島君、成年男子3000M障害で木下亨君、青年男子5000Mで木下春樹君も健闘された思い出があります。選手とコーチが一同となって共通目標へ進んだ結



果は、天皇杯2位、皇后杯1位で青森国体につぎ2連勝で戦いは終了しました。

この写真は、大会終了後、松本広域公園陸上競技場をバックに写した写真です。長い道のりでしたが、選手、コーチの清々しい顔は、安堵感と満足感に溢れていたと思います。これを境に、私は会社経営等が忙しく十分強力でできないことを申し訳なく思っています。今後、できる時は強力していきたいと思っていますので、何卒よろしくお願いします。

編 集 後 記

第56回長野県縦断駅伝競走2007、11、17-18 中央大学の野上裕一郎(全佐久)選手が出場、大会を盛り上げた。全佐久初V、長野市2位、上伊那3位、1区のスタート前に上野選手に調子を聞いた足が痛いとの事、心配すること無く、区間Timeを39秒破り、貴祿を見せつけた。

同じく最終日の11月18日、東京では国際女子マラソンスタート。国立競技場に1位でゴールしたのは、野口みずき2時間21分37秒。大会新で北京五輪代表を確定的にした。また、松本市の松本平広域公園陸

上競技場を発着する第1回北信越中学駅伝では見事長野西部(女子)が優勝した。県大会の屈辱果たし選手や監督、関係者の皆様、とても嬉しかった事と思います。長野市陸協会報第19号の原稿をお願いに出発、業務終了後、外は日が短く真暗である。それでもそれなりに気持ちよく引き受けて頂き、只々感謝の気持ち一杯であります。

2007年も1ヶ月、来年も良き年でありませう様に祈り申し上げます。平成19年12月 広報部長 若松軍蔵

SHINANO MATE
ATHLETIC UNIFORM

しなのメイト 株式会社

〒389-0606 埴科郡坂城町大字上五明992-2
PHONE (0268) 81-1336
FAX (0268) 81-1337



平成19年12月20日

発行所 長野市陸上競技協会
発行人 浦野義忠
編集人 若松軍蔵

題字の“動き”は長野市陸協三代目会長 山浦保氏の書で、山浦会長の頃、市陸協会報紙として何号か発行されていました。

県縦断駅伝2連覇ならず

駅伝部監督 北島正孝

応援・激励・ご支援有難うございました。感謝致しております。このような中で伊藤会長始め、会員の皆様に良い報告が出来なかったこと、私も選手もくやしくなりません。この結果をしっかり受け止め、反省点(原因)を振り返り対応していかなければと思っております。

連覇を、と強い気持ちで望みました。今年の全佐久のメンバーを見て本気で勝ちにきている、区間オーダーを見て1日目・2日目共スタートから主導権を握りにきている、レース展開は痛いほど鮮明に読めました。崩すには先行させない、慌てさせる、混乱させる展開に持って行けば。勝機は。今回、上野裕一郎選手、ふる里選手の佐藤選手、佐久長聖高校4選手出場しているこの大会に優勝したかった。今年の長野市チームは戦力からみて総合力で、と田中駅伝部長、前島キャプテンと深夜までオーダー編成に没頭しました。その後、思わぬ戦力の脱落等でこれしか組めない形の中でレースに挑みました。壮行会で各先生方から頂いた



力強い激励、貴重なる言葉を胸に各選手走ってくれました。この縦断駅伝は中学生、高校生をご指導してくださっている指導者の方の力をなくして戦うことは出来ません。今後共ご協力をお願い申し上げます。特に北信越と重なっている中、小田切亜希選手を使わせて頂き、感謝しております。次の大会には、しっかり結果を出し、皆様始め、長野市民の方々に良いご報告が出来ますよう努力したいと思います。練習メニューは前島キャプテンが、チームのまとめ役は田中部長が、しっかりやってくれております。ぜひ来年を期待して下さい。

長野市駅伝部 小川健三

第56回長野県縦断駅伝競走大会が、11月17、18日の2日間にわたって行われました。今大会は、長野市チームにとって通算10回目の優勝を懸けた大会でもあり、非常に気の抜けない状況下でのレースとなりました。昨年は、優勝という最高の形で県縦断駅伝を終え、それ以降第56回大会も優勝を念頭に当日まで、北島新監督・前島キャプテンを中心にチーム一丸となって練習をしてきました。特に社会人選手にとりましては身体の故障や仕事の都合等によりなかなか練習ができない等様々なハードルがありましたが、無事それを乗り越え、選手1人1人が強い気持ちでレースに挑みました。

2日間を通し、全佐久に圧倒的なリードを広げられる中、チーム全員の心の中には「赤い襪を絶対につなげたい!」「僅差の上伊那には勝ちたい」という思いが強く、結果、それが実現し最後まで赤い襪をつなぐことができ、さらには2位という形でゴール出来たことが大変嬉しく思いました。私自身、まだ力不足ということを感じた今大会の反省点を踏まえ、来年は優勝と総合タイムの更新を目指し、走りたいたいと思います。最後に、日頃からお力添え頂いている長野市陸上競技協会の皆様及び応援、ご支援頂いた皆様に感謝申し上げます。今後変わらぬご指導よろしくお願ひ致します。

長野市駅伝部 平田和也

11月17、18日に長野県縦断駅伝が行われ長野市チームの選手として参加させていただきました。今回で2回目の出場で16区を走りました。

今年は2連覇、10回目の優勝を目指し、1年間練習してきました。私自身は春に膝を痛め、夏には貧血になったりして十分な練習ができず、思ったような走りができない時期もありました。それでも大会が近づくにつれ、調子も上がってきたので、手応えを感じながら本番を迎えました。レースは予想通り序盤から全佐久が飛び出し、それを長野市、上伊那が追いかける展開でした。私の所にタスキが来た時は優勝するには厳しいタイム差でしたが、とにかく

あきらめないで前のチームを追うことだけを考え走り出しました。向い風が強くとタイムは悪かったのですが、順位を上げることができ、チームの力になれてよかったです。今回いい走りできたことで自分自身に自信がたつきました。故障などの苦難を乗り越えていくことにより成長していくということを改めて感じました。今回このような走りできたのは、十分な練習環境を与えてくださることを初めとする多くの方々のご支援があったからだと思います。本当にありがとうございました。今年は2位でしたが、この悔しさをバネに来年は優勝できるように頑張っていきたいと思っておりますので、これからもよろしくお願ひ致します。

国民体育大会に参加して

長野吉田高校 早川恭平

僕は、今年、国民体育大会に初めて参加させていただきました。今までインターハイ等、数多くの全国の舞台を経験させていただきましたが、今回は県の代表として試合をするということで、プレッシャーもありました。ですが、試合が近づくとプレッシャーよりも、早く走りたい、早く勝負したいという気持ちが高まってきました。

秋田の地に入り、自分の高ぶる気持ちを抑えて調整し、試合の日を迎えました。当日の朝は、インターハイと違い、自分自身の為ではなく、長野県の一員として県に貢献したい、その一心でした。予選を順調に通過し、気持ちを最高に高めて



決勝に望んだ結果、2位という成績を取ることができました。

今回、僕がこのような成績を取られたのも、コーチの方々の温かいご指導や長野県の代表として一緒に戦った選手の皆さんのおかげです。そして何より影で支えてくれた家族には本当に感謝しています。

今回、国体に参加させていただき、僕自身肌で感じたことは、次につながる貴重な経験ばかりでした。この経験を生かし、来年、再来年と自分自身さらに飛躍できるように感謝の気持ちと謙虚な心を忘れずに、練習により一層打ち込んでいきたいと思っております。

今後ともよろしくお祈りいたします。

全国高校駅伝初出場の想い

長野東高校 玉城良二

昨年の4月、長野東高校で都大路を目指すという志をもった生徒が3名入学してきました。クラブ活動自体がきちんと確立もできていないばかりか、女子長距離部員は1人もいない状況の中でした。

このような状況の中で、勇気ある進路選択をした3名の生徒は、チームにならないことはわかりながらも、きっと自分たちの頑張ることが必ず都大路に繋がると信じて、1日も休まずただひたすら練習を続けました。幸い昨年は他のクラブの協力を得て、県高校駅伝史に長野東高校の名前を刻むことができましたが、当然とはいえ、結果は5位で、悔しい思いをしました。



本年、同じ志を持った4名の新入生を向かえ、やっと長距離部員のみで駅伝が組めるという、当たり前になった状況になりました。2年越しの目標へのスタート地点に立てたことで、年度当初より「都大路出場」がチームの最大目標として活動をしてきました。

今回、学校関係者、地域の皆様のご支援が大きな力となり、県を代表して都大路を走る機会をいただきました。1・2年生の若いチームで、初出場ですが、レースや勝負に学年、出場回数は関係ないという思いをもち、今まで全国大会のために積み重ねてきた生活と練習の想いをいかに、レースの中で表現できるかが大切だと思います。

私としては、生まれ育った長野市、陸上競技の原点は長野市駅伝部にあります。やっと地元の競技の発展に微力ながら貢献できた喜びと、お世話になった方々への恩返しのため、生徒と共に12月23日、長野東高校らしい身の丈の駅伝を目指します。

陸上クラブ紹介 No.15

西部中学校陸上部

顧問として、この西部中陸上部について胸を張れることが1つだけあります。それは、どこよりも「声」の出せるチームであるということです。

陸上部ならば足の速さに胸を張れ、今どき精神論か、という声が聞こえてきそうですが、挨拶や返事、体操や応援等の場面で大きな声を出すことは、西部中の陸上部で最も重要とする土台の部分です。なぜなら「できる」「できない」といった能力の問題ではなく、「やろうとする」「しないか」といった気持ちの問題であるからです。中学生期は周りの目が気になる時期でもあるため、この気持ちの壁が意外と大きかったりするものですが、これっぽっちの壁が乗り越えられない限り、選手として人間として大きな成長は望めません。声は目標に向かう気持ちを高め、場に活気を与えます。たったこれだけのことで積み重ねれば大きなことにつながります。先日、北信越中学駅伝で女子チームが優勝しましたが、このチームで3年間徹底したのもこの「声」でした。(当然声だけではダメですが、声がなくはダメです)などと偉そうに言っていたものの、私は初任校として本校に赴任してきたた



め、この陸上部が初めて受け持つ部活動であり、さらに陸上に関しては完全な素人でした。そんな私が受け持った当初から指導できるのが唯一「姿勢」の部分でしかなかったというのが正直なところ。ただ、顧問になってからの3年間、選手たちがそれを理解し、貫いてきてくれました。日々声を張り上げ、目標に向かってひたむきに努力を重ねる選手たちの姿は人を惹き付け、感動を与えてくれます。陸上素人であった私がこの世界にはまってしまっているのもそんな西部中陸上部の選手たちのおかげであるなあ、と感じている今日この頃です。

陸上部顧問 北原祐樹

第14回 ホープさん

文大長野高校 添野沙蘭

「時は来る」

「必ず時は来る」今はまだ弱い選手でも、目標を見据えた練習と生活の努力によって、いくらでも成長することが出来るのだと考えさせられることの多い1年だった。

今年の春、IH北信越予選で7位、目標のIHで戦うことをあと一歩のところまで逃がした私は、大きな絶望感を味わった。その時、私は自分の目標が、「ただあるだけ」のものになってしまっていたことに気付いた。すぐ目前にある全国の大舞台を夢のことに思ってしまう、自分から取りに行こうとはしていなかった。凄く後悔した。

夏の合宿で、自分は選手を中心選手に選ばれ、合宿の進行を任せられた。その時、はっきりと他の2人と自分の間に差があることを実感した。全国の舞台で大きく活躍している2人に比べ、力はあるのに未だ、結果を残せずにいる自分に強く孤独感を感じたが、「絶対抜かしてやるんだ」と自分に決意できた良い機会になった。

今秋10月、自分にとって初の全国大会となる国体に出場できることになった。やはり、地元の大大会とは格段に、流れる空気が違った。と同時に、自分

と同じ体格、また、それ以上の選手と戦えたので、自信を持って自分を大きく表現できた。本来、自分はここに居るべきだったと、思い込んでしまっただけだ。

チャンスはどこにあるかわからない。自分が行くべき道はしっかりうまいくよく準備されている。苦しく、悩む時期は誰にだってある。「自分には無理なんじゃないか」と弱音を吐く時だってある。でも、そんな苦しい時期の中には必ず、強くなれるヒントがある。「本物の勝利」への道は、長い時間をかけて作り出される。それを信じて、これからも戦い続けたい。



シリーズ その4 市陸協を支えてくれる方々

御宿 記念館さんは、長野県縦断駅伝大会の審判員の宿になっており、大会前日は、審判会議等で大変お世話になってきました。会長様を始め、奥様の暖かいおもてなしには大変感謝しております。長野市陸協の会議を始めとした駅伝のカンパ等にも、毎回ご協力をいただいております。御宿の益々のご発展を心より願っております。

御宿 記念館 会長 渡辺亨様



長野市陸上競技協会（市陸協）様には毎度ご利用いただきまして、心より御礼を申し上げます。

市陸協様のお名前をお聞き致します度に、高校生陸上の春の大会や秋の大会、また新人戦を思い起こします。

私共は大正元年より善光寺の近くで、小さな旅館を営ませていただいて居ります。私も既に70才を越え、家業を息子にまかせましたが、現役の頃から市陸協の皆様方には大変御愛顧をいただいております。

当時、現役でいらした小口先生、伊藤先生、高橋先生方のご活躍は今に語り継がれて居ります。また、県内各地に赴任され後輩のご指導に力を注がれて居られる各先生方も各大会ごとに選手の皆様とお越しいただき、当時の思い出話が花が咲く今日この頃でございます。

私共の業界は、オリンピック以後、新幹線・高速道路の整備等も整い、大変厳しくなっております。

このような中、立派になりました各種競技場の施設を利用される様々な大会が、今後も盛んに長野市で開催されますことを深く望んで居ります。最近では、毎年行われております信濃毎日新聞社主催の長野県縦断駅伝大会におかれましては、盛大な審判会議が開かれました。市陸協の皆様方にお会い出来、ご挨拶ができる良い機会とございました。従業員一同も大変楽しみにして居ります。私共といたしまして、皆様の活動をお手伝いさせていただける数少ない場と心得て居ります。夜遅くまでのお打合せと、翌日は早朝より所定の場所へのご移動とご苦労の程をお察し申し上げます。

この他にも、オリンピック記念マラソン等におかれましても同様に大会を支える皆様方の情熱を強く感じさせていただきました。これからも、長野市に於けるスポーツと交流の中心となつてご活動いただけます事をお願いいたしますと共に、市陸協様のますますのご発展を御祈念申し上げます。